編集後記

今回の会報は、2024 年 11 月 9 日に日本農学アカデミー、（公財）農学会、（一社）日本農学会の 3 団体で共同開催した公開シンポジウム「能登の今」の講演記録を掲載いたしました。当日は報告者、主催団体関係者以外に、会場に 56 名、オンラインで 173 名のご参加があり、ご報告をうかがった上で、熱心な議論をすることができました。

このシンポジウム講演録は、2024 年 1 月の能登半島地震による農林水産業への被害状況と、そこからの復旧復興過程において行政担当者、石川県内 2 大学の研究者、そして現場の実務家の皆さんがどのような想いで活動を続けられたかを自らの視点でまとめられた貴重な記録となっています。

半島という地理的社会的特殊性を背景にした中山間地域であるがゆえに、今回の大規模地震がもたらした被害は甚大でした。発災直後からその深刻さが認識されて、国土強靭化推進会議においても、すぐに本件に関する復旧復興のあり方が議論されることとなりました。

ただ、復旧復興の途中で発生した同年 9 月の奥能登豪雨がさらなる被害を加えたこともあり、現時点でもがれきの撤去などが完全には行えておらず、住宅、生活インフラの復旧が遅れています。その中で、地域の生業であり、観光など関連産業の基礎であり、そして文化の原点でもある農林水産業は本地域の基幹産業として、その立ち直りが復旧復興の要であることは間違いありません。ただ生活関連に比べると被害の実態と復旧復興における課題について、一般に詳しく紹介されることは少なかったかもしれません。

今回の報告では、農林水産業がいかに地域振興と結びついてきたか、そのことを踏まえた上での復旧復興に向けてどのような技術的、社会的、制度的課題があるのか、詳しく述べられていて、農学が貢献できる数多くのことがあると知りました。現場の方々が自ら取り組む姿、それを支える行政、地方大学の役割については、東日本大震災からの復興過程と共通する論点もあり、一方で能登半島ならではの特徴もあったと思います。災害が多発する日本におけるすべての地域への教訓ととらえると共に、まだ復旧復興の道半ばであることを踏まえて、今後も復興支援についてオール農学で連携していく必要を感じた次第です。

（中嶋康博）